
少年の知恵

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年の知恵

【Nコード】

N2190S

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

トンガのムオイはいつも鯨のククに漁の邪魔をされていました。そのムオイがククに対する仕返しとは。南洋を舞台にした童話です。

第一章

少年の知恵

トンガにある古いお話です。

ムオイはお父さんとお母さんの手伝いで漁師をしている男の子です。いつも真面目に働くい子でとても明るい性格をしています。

彼は泳ぐのも得意で海の中に飛び込んで銚で大きな魚を獲ったりもします。しかしです。

その彼にです。いつも意地悪をする相手がいました。

鯨のククです。彼は何かというとムオイのところに来てです。魚を取ったりぶつかってきたりして嫌がらせをしてくるのです。

そのククに対してです。ムオイは怒って言うのでした。

「いつも何でそんなことするんだ」

「決まってるだろ、楽しいからだよ」

こう言い返すククでした。その大きな身体を海の中で泳がせながら言うのでした。彼等は今海の中にいて言い争っています。ククがまたムオイが捕まえた魚を横から出て来て食べたからです。

「こうして御前をからかうのがな」

「性格悪いな、御前」

思わずこう言い返すムオイでした。

「何時か思い知らせてやるからな」

「そんなことできるものか」

ククはそのムオイに対して笑いながら返します。

「絶対に」

「いいや、やってやるからな」

こう言うムオイでした。海の中で泳ぎながら地団駄を踏んでいます。

「もう怒ったからな」

「勝手に怒ってる」

「本当に性格の悪い奴だな」

「人間が海の中で鯨に勝てるものか」

ククの今度の言葉はこれでした。

「大きさだけじゃないからな」

「その牙か」

「それだけじゃないんだよ」

その二つだけではないということです。鯨は。

「泳ぎが違っただよ、泳ぎが」

「何っ、泳ぎか」

「鯨はいつも泳いでるんだよ。寝てる間だってな」

鯨はそうした魚なのです。とにかくいつも泳いでいないと駄目なのです。ククはマオイに対してこのことを言うのでした。

「人間はそうはいかないだろ」

「それはそうだけれどな」

マオイもそのことは認めるしかありませんでした。人間だからです。

それでもだと。彼は言いました。

「人間だって負けるものか」

「この海の中でかい」

「そうだ、鯨に負けるもんか」

こうククに言うのです。

「見てろよ、御前をぎゃふんと言わせてやるからな」

「言うねえ。それじゃあな」

「ああ、それじゃあ何だ」

「実際に俺をぎゃふんと言わせてみな」

ククは笑いながらマオイに告げます。

「そんなことができるんだったらな」

「やってみせるさ。それでもしな」

「ああ、もしい」

「御前をぎゃふんと言わせられたら」

マオイはあくまで、です。ククに対して強気でした。

「その時はもう悪戯なんてするなよ」

「わかってるさ。それじゃあな」

「楽しみにしてるさ。精々頑張るんだな」

ククはマオイを最後まで馬鹿にして今はその場を泳ぎ去るのでした。マオイはそのククが泳いでいくのを見てからです。まずは海から出てお家に上がりました。

そしてそれから。彼はお父さんとお母さんに相談をしました。

「ねえ、いいかな」

「んっ、どうしたんだ？」

「何かあったのかい？」

「うん、鮫と喧嘩してるんだ」

ククとのことをです。まずはそのことをありのまま話すのでした。

「あのククとね」

「そうかい、あいつとかい」

「また喧嘩してるんだね」

「そうだよ。それでね」

このことを話してなのでした。

「あいつをぎゃふんと言わせたいんだ」

「それはまた物騒だな」

「そうね、ぎゃふんとなんて」

お父さんとお母さんはです。マオイの何時になり強い言葉を聞いてこう言うのでした。そしてそのうえでまた二人に話すのでした。

「そんなことを言うなんてな」

「しかもいきなりって」

「あいつの悪戯にはもう頭に来ているんだよ」

マオイはその小さな口を尖らせて言います。

第二章

「お父さんとお母さんだってそうだろ？それは」

「まあそれはな」

「その通りだけどね」

それはお父さんとお母さんも同じでした。二人もククの悪戯、具体的には魚を取られたり船に体当たりされたりしてです。困っているのです。

それでマオイのその言葉を聞いてです。こう答えたのです。

「あんな悪い鮫はいないよ」

「私も見たことがないわ」

「だからだよ。それでどうしたらいいかな」

また言うマオイでした。

「本当に」

「海で鮫をねえ」

「ぎゃふんと言わせるなんて」

「無理かな」

またお父さんとお母さんに尋ねます。

「それは」

「うっん、鮫をか」

「それも海の中で」

「やっぱ無理？」

マオイは二人が中々答えないので不安になってまた尋ねます。

「それって」

「いや、鮫か」

「鮫よね」

二人はマオイを困らせない為にです。顔を見合わせ合ってそのうえでこう言うのでした。

そしてです。マオイに対しても言いました。

「どんな人間でも動物にも弱点はあるよ」
「無敵の存在なんていないのよ」
「それは鯨よだね」
マオイはその鯨のこともは為しました。
「鯨だって海の中でも」
「うん。ただね」
「鯨はいつも海の中にいるから」
弱点は、ということです。
「あればいいんだけどな」
「どうなのかしらね、それはね」
「えっ、ないよ？」
「いや、銛で刺せば死ぬよ」
「それはね」
そうすればだといいます。
「けれど。鯨は泳ぐのも速いし」
「そうするのだって一苦労よ」
「そうだよ。僕も泳ぐのは速いけれど」
マオイは泳ぐことがとても上手です。けれどです。
「いつも海の中にいる訳じゃないから」
「そう、それだよ」
「それなのよ」
二人が言うのもこのことでした。
「人間は陸にいて鯨はいるな」
「それぞれの場所が決まっているから」
「相手の場所では何かをしてもな」
「簡単にはいかないわよ」
「それにだ。ククは鯨だ」
「それも問題なのよね」
お父さんとお母さんはさらに言うのでした。
「鯨は寝ても起きてても泳いでいるからな」

「もう泳ぐのでは誰にも負けないわよ」

「そんなのを海でぎゃふんと言わせるとなると」

「ちよつとね」

「そんなの難しいんだね」

マオイはお父さんとお母さんに言われてそのうえで困った顔になりました。

それで、です。あらためて考えるのでした。

「あいつに勝つのは」

「うん、まあ鮫は道具を使えないけれどな」

「それは人間が使えるけれどね」

「道具？」

お父さんとお母さんの今の言葉はです。マオイの心に残りました。そして、です。こう考えるのでした。

「じゃあその道具を上手に使えば」

「何とかなるかも知れないね」

「そうしたらね」

「そうだね。それじゃあ」

こうしてです。マオイはとにかく道具を使おうと決めました。そうして海で使うその道具を見ていきます。そうして目の前に集めたのは。

銚に釣竿にそして網に。そういったものでした。

まず銚を見ます。これは。

「あいつに当てるのは難しいよなあ」

それはとてもでした。

「とても。釣竿も」

それも見ます。しかでした。

第三章

「これだつてな」

ククの大きさを考えればでした。どう見てもどう考えても無理でした。かえってマオイが引っ張られるだけです。その子とは簡単に想像が付きました。

これでマオイは困りかけました。しかしです。網を見てなのでした。彼はふと考えました。

「若しかしたら」

頭の中で閃くものがありました。そうしてなのでした。

何日かあれこれと何かをしてからです。海の中に入ってそこでククを呼ぶのでした。

するとククはすぐにやって来ました。そのうえで彼に問い返します。

「やるつもりだな」

「ああ、そうだ」

海の中で胸を張って彼に言います。

「御前を絶対にぎゃふんと言わせてやるからな」

「ふん、やれるものならやってみろ」

ククの強気はここでも変わりません。

「やれるものならな」

「言つたな、それじゃあな」

「ああ、どうするんだ」

「ここまで来い」

ククに対して言います。

「いいな、こつちにな」

「俺と泳ぎで勝負するっていうのか」

「それは来てみればわかる」

あえて多くは言わないのでした。そのかわりにです。

早速泳ぎはじめてです。それからククに言うのでした。

「こつちだ。来い」

「泳ぎで人間が魚に勝てるか」

ククはそのマオイに対して自信たっぷりに言い返します。

「ぎゃふんと言わせてやるからな」

「ふん、それは僕の台詞だよ」

こんなやり取りをします。マオイは自分のありったけの速さで泳ぐのでした。

ククはそのマオイを追い掛けます。けれどです。

マオイは小回りを活かしてあつちにと泳ぎ回ります。それに対して大きくてしかも泳ぎの速いククは困惑してしまうのでした。

「糞っ、何てすばしっこい」

「見たか、小回りなら負けないぞ」

マオイは泳ぎながら追い掛けて来るククに対して言います。

「こうしてな」

「それが俺をぎゃふんと言わせることか」

「いや、違う」

それは違うというのでした。

「それはこれからわかることだ」

「だからそれは何なんだよ」

「来ればわかる」

まだ言おうとしないマオイでした。

「そうしたらな」

「ふん、それじゃあな」

そう言われてです。ククも頭にきてです。

そのうえで、でした。ククはそのすばしっこく泳ぎ回るマオイを追います。その追いかけっこが海の中で暫く続いたのです。

そしてです。マオイはある岩と岩の間に入ろうとするのでした。

第四章

「今度はそっちか」

「こっちに來い」

マオイはまたククに対して言います。

「僕はこっちだぞ」

「言われなくてもな」

ククもマオイのその言葉に応じます。

「言ってやる。そしてここだな」

「どうするんだ」

「鯨の力を見せてやる」

こうマオイに言うのでした。

「海じゃ鯨の方がずっと強いってことをな」

「そう思うのなら來い」

「ああ、行ってやるさ」

「こっちだ」

マオイの言葉に完全に乗ってです。ククもその岩と岩の間に向かいます。けれどここで。

マオイはすつとです。上にあがったのです。岩と岩の上にです。

「えっ!?!」

「さあ、やったぞ!」

そのマオイの動きに驚いたククにです。マオイは勝ち誇った声で言ってきました。

「クク、ぎゃふんと言え!」

「どうということなんだ。一体」

マオイは何かあると察しましたが急には止まれません。そしてです。

自分が突き進むその岩と岩の間にです。あるものが拡がっているのが見えました。それは。

網でした。何重にもなった網がそこにあるのでした。そしてククはそこに。

突っ込んでしまいました。そのまま動けなくなります。ククは大慌てで言うのでした。

「な、何だよこれって」

「色々考えたんだけれどさ」

マオイは頭から網に突っ込んで動けなくなってもがくククに対して言ってきました。

「人間は道具を使えるじゃない」

「それがどうしたんだ」

「だからだよ。それでククをぎゃふんと言わせようってね」

「それでこの網だっていうのか」

「そうだよ。ククを怒らせてここまで連れて来てね」

「俺をここに突っ込ませてか」

「そういうことだよ。本当に上手くいったよ」

マオイはにんまりとして言いました。

「こうしてね」

「糞っ、してやられたな」

「それだけけど」

マオイはそのにんまりとした顔でククに尋ねます。

「言う？ぎゃふんってね」

「そのことか」

「鯨っていつも泳ぐんだよね。泳げないとどうなるの？」

「その時は大変だよ」

「ついつい言ってしまったククでした。このことを。」

「死んでしまうんだよ、鯨はそういう生き物なんだよ」

「じゃあ言えるね。あの言葉」

「ぎゃふんってか」

「そうだよ。僕が勝ったんだから」

「ああ、言うよ」

ククはもがきながら苦しい顔で言葉を返しました。

「ぎゃふんつてな」

「今言ったね」

「聞いたな」

「確かにね。それじゃあね」

「いいから早くこの網何とかしろ」

ククは少しずつ苦しくなっています。

「さもないと死んでしまっただろ」

「わかってるよ。それじゃあね」

マオイは勝ち誇りながらククの網を解いてあげるのでした。ククは自由になってから忌々しげに彼に対して言うのでした。

「ったくよ、鯨が海の中で人間に負けるなんてな」

「へへへ、やったよ」

「しかしな。覚えてろよ」

ククの忌々しげな言葉はそのままです。

「今度は俺が御前をぎゃふんと言わせるからな」

「楽しみにしてるよ、その時をね」

笑顔のまま返すマオイでした。ククをぎゃふんと言わせたことに満足しています。

これがトンガにある古いお話です。人間のマオイはその知恵を使って鯨のククをぎゃふんと言わせました。何事も頭を使えば上手くいく、そうしたお話なのです。

少年の知恵 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2190s/>

少年の知恵

2011年4月4日21時25分発行